

禅の友

—Zen no Tomo—

6

June 2021





ご本山だより

大本山永平寺 【峯の色 谷の響き】

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三一〇二



夏が近づくにつれ、大本山永平寺では、山内外の草木や苔などが青々ととなり、また、谷の水も日の光を受け、涼しげに流れております。

永平寺の修行僧たちは深い山々に囲まれた中で、大自然の有り様ようと自分の姿を重ね合わせ、日日にちにちの行持を修行しております。

道元禅師さまは

峯の色 谷の響きも 皆ながら

吾わが釈迦牟尼の 声と姿と

とお歌いになりました。

峯の色、谷の響きはお釈迦さまの姿、お声そのものでございます。

永平寺を取り囲む山々には優しさも厳しさもあります。

その大自然の全てが「ほとけの御おんいのち」そのものであり、私たちの「いのち」もまた、大自然の中で生死しているのです。

しかし、日常生活で仕事や用事に追われ、慌ただしい日々が続きますと、身体からだは疲れ、心休まる暇もなく「ほとけの御おんいのち」を直ぐに見失ってしまいます。

永平寺の修行僧たちは道元禅師さまのみ教えの如く静かに坐して、姿勢を調ととえ、呼吸を調ととえ、心を調ととえて「ほとけの御おんいのち」としての修行生活を送っております。



ご本山だより 大本山總持寺

【でんこうえ伝光会せつしん攝心
さんふざん参と不参とに依りに依りて、てんじんみでんじん徹人未徹人あり】

大本山總持寺

☎〇四五・五八一・六〇二二



總持寺では本格的な梅雨に入ると
はじめとした気候になり、僧堂内も
露がうつことがしばしばあります。

新型コロナウイルスは変異株の出
現により未だその猛威は収まりを知
りません。

「まん延防止等重点措置」の適用が
出されている都道府県もあり、今後の
本山の行持も多大な影響を受けるこ
とは必至であります。

今年度の伝光会攝心は感染症対策
を十分に考慮しつつ、六月七日（月）
から十一日（金）までの五日間の日程
で行われ、期間中は池田魯参老師のご
提唱による『伝光録』を参究いたしま
す。

この書物は正安二（一三〇〇）年に

大乘寺において瑩山けいざん禪師がお示しに
なられたもので、お釈迦さまから始ま
る五十二人の祖師方についてそれぞ
れ章を設け、お一人お一人の足跡やそ
の教えを示されています。

この『伝光録』を参究し、坐禅に励
むのが伝光会攝心なのです。

副題の言葉は「仏道に参じるか参じ
ないかによって徹底した人と徹底し
ない人の別れ道がある」という『伝光
録』の一説です。

仏道修行そのものが悟りであり、そ
れによってのみ徹底の人（徹人）とな
ることができるとのことです。

春上山の修行僧にとつては初めて
の攝心であり、徹人となりうる大切な
修行期間なのです。

選・坊城俊樹

亡き友らぞろぞろ来たる日向ぼこ

千葉県 甲斐 勇

評「日向ぼこ」という季題はなんとも暖かくて、夢うつつという雰囲気がある。そんな感じでウトウトしていると、夢か幻か亡くなった友たちがやって来た。この季題の本意というのは案外、此の世と彼の世を結ぶことにあるのかと思ってしまう。

落第生小石投げ合ふ川原かな

東京都 鈴木 英治

評二人の落第生が川原にやって来てしょんぼりと石を投じている。春の押し詰まったこの季節は、学生や社会人にとっても節目である大切な時だ。でも心配しなくてもよい。落第して大人になって、それなりに苦学し、立派な社会人になった人にこそ大物が多い。

◆ 散るといふよりもふるへてみる落花 佐賀県 池内 淳子

◆ 影あれば影にほんのり春の色 大分県 久恒 大輔

◆ 丸めた背ゆつくりゆるめ水ぬるむ 大阪府 口本 美智子

◆ 有りあまる世のさびしさを花辛夷 東京都 長谷川 瞳

◆ 春嵐窓いつばいに荒るる海 北海道 大野 節子

◆ 沖すでに荒れる気配や鱒東風 鳥取県 眞山 博充

◆ 日向ぼこ手鏡越しの夫ねむり 群馬県 栗原 久美子

◆ 三十年春待ちたると流人小屋 山口県 栗屋 邦夫

◆ 釣竿のあたり楽しむ赤蜻蛉 三重県 西村 廣視

◆ 観音の白毫さらり春立ちぬ 新潟県 浅野 朝女

選者吟

スワンボートを漫画にしたる霞かな 俊樹

作句小見「スワンボート」というのは、いつ見ても漫画に見えてくる。黄色い嘴とまん丸の瞳がそう見えるのだろうか。ましてや春の霞のころはなおさらである。それに乗っている恋の二人もまだ幼い。少女漫画みたいな恋をして、大人になってゆく。

選・長澤ちづ

人は皆詩人になるさ春隣ひかりの空を見上げたならば

秋田県 小松紀子

評 三句目の「春隣」は冬の季語。春がもうそこまで来ているけれどまだ冬といった季節の変わり目の空、その微妙な美しさを、こんな空を見た人はみんな詩人になると詠う。この作者の詩心を讀みたい。

万緑に包まれ小さき我が憂ひふるさと帰りの列車の中に

東京都 鈴木正作

評 見渡す限り緑という自然の勢いが最も強い季節には、自分の憂いは小さいものに思える。それだけに一層自愛の念に促されるもの。故郷からの帰路なれば尚のことである。

◆ 若き日の通学路に在りしドームなり骸となりて戦を語る

広島県 天野瑩子

◆ 孫は言ふ「海苔屋の娘に振られた」と大盛ごはん海苔で食べつつ

静岡県 杉原民子

◆ 吹く風に蓮の広葉の白き露右へ左へ光りつつ揺る

山口県 中井清子

◆ 入口でおでこ検温手消毒十数人のマスクの通夜に

静岡県 末光愛正

◆ 山に帰る日の間近さか鶴一羽梅の木末に遠くを見てをり

茨城県 田口昭子

◆ バス停に除雪の壁できどこで待つ大雪四日の記録更新

岩手県 千葉喜恵

◆ 畦に咲くタンポポの黄に見守られ今年も棚田に鋤を打ち込む

長野県 両角徳子

◆ 酔い潰れし花の金曜なつかしむ馭で寝たけど飽離さず

奈良県 鈴木重雄

◆ コロナ禍の生き苦しさを感じつつも蠟梅の香に身の解かれゆく

三重県 藤川幸子

◆ 雪深き地を離りたる老父母を案ずることなし今年の冬は

広島県 別所悦子

選者詠

ごつごつの幹よりいきなり咲く桜退つびきならぬ
何かがありて
ちづ

作歌小見

コロナ禍のなかにあつても自然は変わらずに動いている。蠟梅の香に解放感を味わう藤川さんの一首や、畦に咲くタンポポの黄に励まされ農作業をする両角さんの一首にほっとします。桜の花も懸命に咲いていました。